

巻頭言

真栄平 房昭

イギリスの歴史家E・H・カーの有名な言葉に、「歴史とは、歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」（『歴史とは何か』と指摘されています）。

「現在」の状況を深く理解するためには、その歴史的背景としての「過去」を見つめ、「現在と過去との対話」がなにより重要であることはいまでもありません。神戸女学院の歴史と向き合い、地道な「対話」を続ける史料室の発信情報は、これまでの『学院史料』にもさまざまな成果として反映されています。

今回の二十二号は原稿の量が増えたこともあり、通例とは少し趣の違う特別編成号をお届けします。また、『学院史料』の編集体制が変わり、「編集委員会」方式になりました。具体的な編集方針やテーマについて、編集委員と史料室のスタッフが互いに協力し、自由に意見を交換しながら、『学院史料』の内容を今後さらに充実したものにしていきたいと、願っています。

「時代」の移り変わりを反映するかたちで『学院史料』の編集スタイルも柔軟に変化していくのは、ある意味で自然なことでしょう。どのような時代であれ、歴史と現在を見つめる基本姿勢だけはやはり一貫したいと願っています。

その基本姿勢とは一言でいえば、一三〇年を越える神戸女学院の「歴史」をふまえながら、「現代」に生きる私たちが果たすべき役割をそれぞれ自覚的に考えながら、これからの学院の「未来」を展望していくことに尽きます。

『学院史料』を通じて発信された「歴史情報」をふまえつつ、学院の「未来」に向けて道を切り拓いていくためには、今後さらに改善すべき問題点、乗り越えるべきハードルも少なくないと思われます。巻末（奥付）の連絡先まで、どうぞ、皆さまの自由なご意見、ご感想をいただければ幸いです。

（大学図書館（史料室）長）